

ミオシス

詩・小説・評論

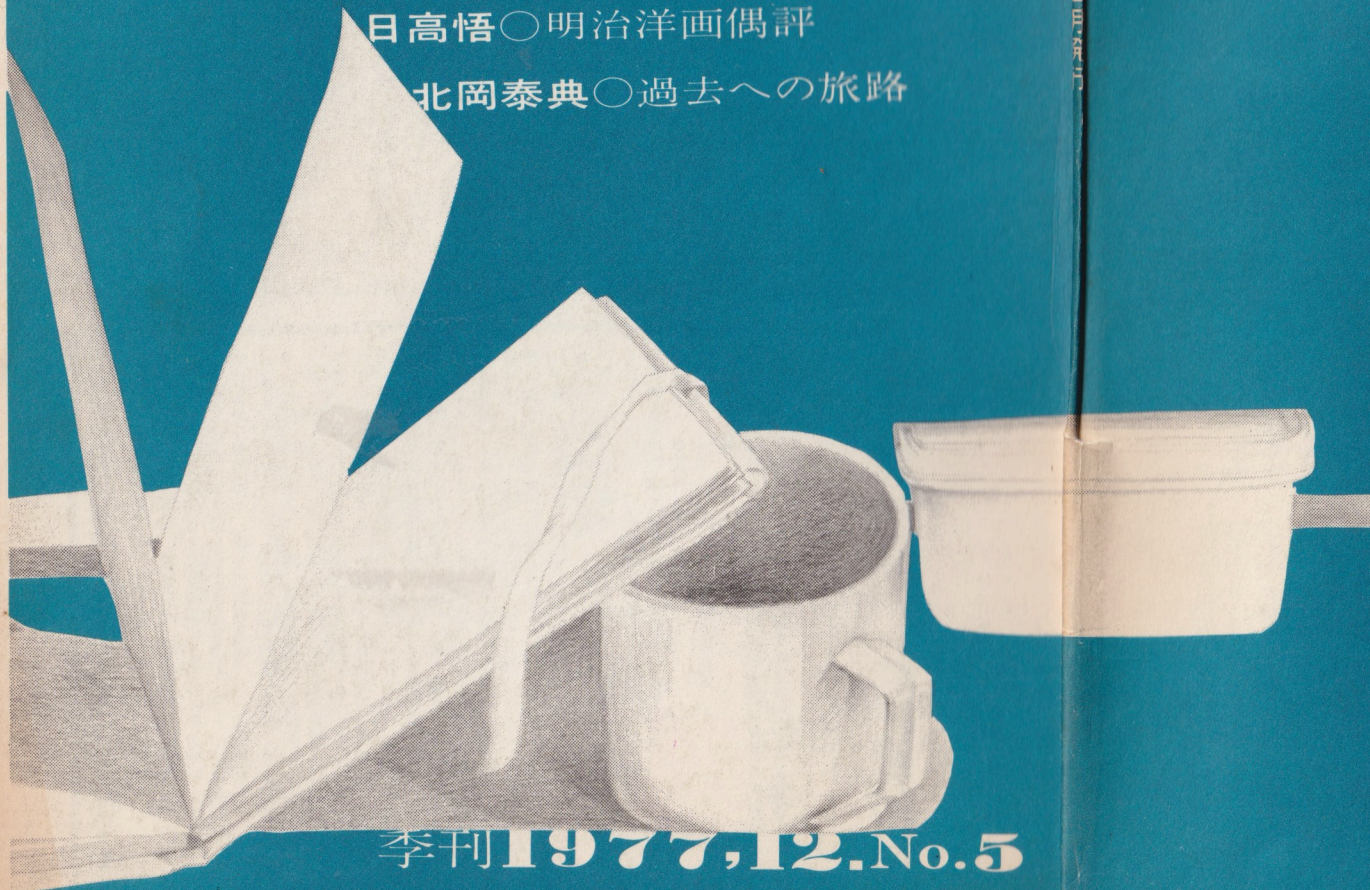
屈原抄吾○空の棺桶 高原章子○からす 朝の唄

依田圭一郎○夜の果実

なんばみお○すいれん 午後の水面

日高悟○明治洋画偶評

北岡泰典○過去への旅路



季刊1977,12.No.5

ミオシス 第5号 一九七七年十二月発行

に終わった精神の過程に興味がある。ひとたび表現されてしまった絵画の光沢は、それが画家たちの精神的夢想を永遠のロゴスとして追放することにおいて社会的所産となり得る。それは例えばゴッホの「狂気」やレンブラントの「生命」やクルーベの「真実」のように、あらかじめ擁護されていた画家の精神が、究めて高い気密の中——すなわち彼らの無意識という名のアトリエ——に封印されているときには確かな姿を持つものではないかのように思える。彼らの無意識の低地は、既に物と世界に対する偏愛の中にこそ存在はすれ、決して表現された画布の上には姿をあらわさぬものである。従って我々が彼らの絵画から受け取る響きは「精神」としてはあっても、決して「無意識」ではない。そこで再びこれらの近代の画家が、精神的な当為の全てを、完成された「絵」の呪縛から切り離そうとするとき、我々はそこに本来彼ら自身の所産となるべき「無意識」の夢の系譜を見ることがなるのである。そしてこのようなものとして、近代日本の画家たちは洋画のモチーフと対峙せねばならなかった。それは稀有な邂逅ではあったが、確実に「明治洋画」は、その精神史の潮流の中にどっぷりと身をひたすべきであったのだ。

△続稿▽

〈連載〉 過去への旅路(一)

あの頃は幸福だったかもしれないという想念がふと疾風のように私の脳髓の皮膜質の片隅を掠めとおった時、私は思わず煙草を持つ手をとめる。一瞬の思考の空白状態。ストップモーションのような意識活動の停止。

古代の史料を聚めた博物館の中を彷徨いあるく時に、過去についての確かな情報を与えられつつもそれらを初めて目にした驚きのあまりに判断がまるでくだせない、いわばそういう状態に私はいたのだ。たとえば心理学の実験で真正面から強烈なライトの光を当てられて、一瞬間の中まですっかり真っ白に染まり、それまでの意識が中断されてしまっただけで、放たれたか判らなくなる、そういう感覚に似たものを私は味わっている。私はこのいささか小気味よい宙ぶらりの中で、放心状態を続けるのだ。

やっこのことでその甘美な虚脱感から自らを回復させた時、私は今まで考えていたことがどうしても思いだせない

第10期1978年度生徒募集

4月開講 申込受付中!

美術校

東京都千代田区神田神保町2-20第2富士ビル3F ☎03(262)2529

二年制教程

細密画工房 ■ 指導 立石鉄臣
彫刻工房 ■ 指導 小島広志

手塚登久夫
水島道雄

デザイン工工房 ■ 指導 木村恒久
油彩画工房 ■ 指導 中村宏

一年制教程

映画技術工房 ■ 指導 鈴木清順
寛正典

木村威夫
大和屋竺

鈴木岬一

絵・文字工房 ■ 指導 赤瀬川原平

最終美術思考工房 ■ 指導 松沢有

写真工房 ■ 指導 成田彦彦

シルクスクリーン工房 ■ 指導 岡部徳三

石版画工房 ■ 指導 阿部浩

描写研究室 ■ 指導 菊畑茂久馬

基礎デッサン講習会(入会随時)

芸術の王道に魁けんとする者は来たれ

詳細な案内書を送ります(100円切手5枚でお申し越し下さい)



北岡泰典

という焦燥感と、逆にそれまで考えていた事柄をすっかり忘れてしまったという爽快感との狭間で、十年前の自分とまだ脱殻のようにポカンとしている現在の自分を同一視しようと努める。そういう時に、紫煙が空中にとめたままの指先から立ちのぼって私の頬を掠めるに委せたまま過去への追想に耽り、あるいは現在の自己を総体的にとらえようとすることは、私にこの上ない慰安の時間を提供してくれるのだった。

背のない金属の丸椅子に腰かけている私はしかし自分をほとんど十年前の自分としてしか認識することができずにいる。自分が二十歳の顔をもち、二十歳の軀をもち、そして二十歳の思想をもっている。このことは心ならずも私の唇の端に軽い笑みを泛かべさせ、私の胸部にはこそばゆい感覚を巢食わせる。私はいまさっき逸る心を抑えつつ道路を駆け走ってきたばかりの青年のように息を荒くしながら「全くあの頃は」と呟く。「あの頃は若すぎたといっ

よいだろう。自分では充分老成しているつもりで、またそのように行動しもした。しかし今思っておこしてみてもそれが間違いであったことが判る。あの時分は何か急に急かされているかのように生きていただけだ。すべてに對して焦りを感じていただけなのだ。そしてあの女に對しても「私は口を嚙む。そして足許のスリッパに眼を落とす。毛のほつれたバス・ローブが眼に入る。使い古されたスリッパは赤いけばけばしい色をしている。視線をテーブルの上に移動させる。円錐の頂点を断截した型の傘を被った電氣スタンドの脇に、部屋番号を打った青いセルロイド板のついたキーホルダーが見える。透明なガラス製の灰皿はテーブルの表面の木目をちようど虫眼鏡のように拡大して見せている。すでに数本の煙草が私の無意識的な苛立ちを示すかのようにはほとんど元の長さのまま無動作に消し捨てられているその灰皿の中に、私はやつのことで、停止させたままだった指先を移動させて、そのまま落ちずに長く燃え竭いていた煙草の灰を捨てて、短かくなつた煙草の燃え先に眼がゆく。金色の箱に入ったロング・サイズの外国製煙草だ。フィルターのすぐ先にセピア色の裝飾文字で名柄のイニシャルが二字印刷されている。この煙草を吸いはじめたのはちようどあの頃だ。そして十年経った今もまだ同じ名柄を吸いつづけている。そう思っておこして、私はますます現在の

は今ふっくらとしたシーツの掛かった二台のベッドの間の隙間に立っているのだが、ふと暖房の音が気になって窓のすぐ下にあるスチームまで足を運び、その装置に手を翳してみる。熱せられた空気が掌に衝突し、ついで指の間を掠め通るのが感じとれる。

今度は実際に頬が照らし出されている私は遙か右手の夕陽を見ようとして窓に顔を近づけると、吐く息でガラスが曇ってしまい、思わず外気の冷たさを思い遣った。夕陽はぼやけた輪郭をもったままゆっくりと古い街並みの中に沈もうとしているところである。色のくすんだ青い屋根や赤い屋根、それに大多数の昔ながらの瓦屋根にほとんど黄金色の太陽が反射している。街全体が霞んで見える。しばらくの間その、一日の終りを告げ知らせている暖い落陽を凝視していると、突然視野が白いもので遮られてしまった。ガラス窓に顔をくっつけていたので、吐く息がガラスの曇りを払ってしまったのだ。私はその曇りを拭きぬぐうこともしないで、かわりに眸の位置を横にずらして新しい視界を求め得ると、ロックをはずして窓を開けてみる。瞬間身を切るような冷たい空気と、ガラスによって室内からは遮断されていた喧しい自動車の騒音が同時に入りこんでくる。身を乗り出して頭をその厳寒の空気の中に投げ入れてみる。真下の広い駅前通りでは小さくなつた自動車がひしめきあ

自分が過去の自分に牽引され、遂にはスクリーン・トリックで二重の像が一致するような具合に完全に重なりあうのを感じる。煙草を口許に運び、最後の一服を大きく吸いこんだ時、私はまだ煙で輪をつくることができるかどうかを試すことを思いついた。あの頃の孤独な一人遊技。私は顔を挙げ、口を丸くし、間歇的に煙を吐きだしてみる。すると輪郭のぼやけた煙の輪がようやくできる。意味のない安堵感が私に訪ずれる。私は椅子から立ちあがり、立ったまま手を伸ばして灰皿の中で煙草を揉み消した。その時指先に力をいれてフィルターを挽ぎ取ってしまうが、これは私の十何年来変わらぬ癖なのだ。頬に手を遣ると無精髭の肌触りが指先を刺激する。

私はこの部屋を見まわす。廊下に通じるドアの左脇にバス・トイレの木製ドアがあり、そのドアの下部に開いているいくつかの空気取り入れ用の矩形の穴からは消し忘れた電灯の光が漏れている。壁には何も掛かっていず、ただ暗い空疎な平面が私の正面に現前しているだけだ。カーテンの引き開けられた窓には私の見えない方角から赤っぽい夕陽がほとんど水平に差しこんできていて、窓際の壁を鈍い紅色に染めている。その照り返しで私の頬まで赤く染まったような気がして、私は顔面に火照りを感じるが、両手で頬をおさえてみるとそれは気のせいであることが判る。私

うようにたくさん往来しているのが瞰下ろせたが、その道路にも、市内の家並みの屋根の上にも雪が斑に溶け残っていて、それが柔い黄金色の夕陽の束と混濁りあって、まるで波靜かなる暗緑色の海面上に、水平線上にある夕陽の、裂け乱れた夥しい数の反映の小片が揺蕩っている、そんな風景をつくりだしていた。

私は冷風に曝した耳の付根に痛みを感じて頭を二、三度うち震わせるが、かまわず駅を見ようとして顔を左側に向けると、このホテルの名を刻んだ大きな看板がその視野を妨げたので、子供っぽい失望を味わい思わず舌打ちをする。頭を窓の内へ引っこめる時、ふと正面に建っている高いビルのことと同じ階の一室から人影がこちらを窺っているのに気づいた。私は悴んだ手で窓を閉め、冷静を装ってカーテンを両側から引くが、内心では無闇矢鱈に落ちつかない自分が見られるという意識が私の動悸を速めたのである。私はバス・ローブのポケットから煙草を一本抜き出して、ベッドの蒲団の上に放りなげあつたライターで火をつけると、窓際にあるもう一つの丸椅子に、壁を背にして腰掛ける。一服一服ゆっくりと煙草の煙を吸いこむと、ようやく胸の動悸が収まってきたようだ。

私の前には二台のベッドがあるが、もちろん私は一人で旅をしている身である。妻もついてきていなければ情婦が

一緒であるわけでもない。ではどうしてベッドが二台あるかという、先程私がこのホテルのカウンターに入ってきた女事務員に「お部屋の種類は？」と訊かれた時、駅前からずっと意識の中で十年前の自分を迎っていた私は思わず「ツイン・ルーム」と答えてしまったのだった。そしてその二十歳過ぎの女が「おつれさまは？」と不審そうに尋ねるのにも一瞬躊躇したのち「あ、いや、いや、いや、いや、それがかまわない」と答えたのであった。そういうわけでシングル・ルームではないツイン・ベッドのある部屋に案内されているのだ。

私は壁に吸ってもしない煙草を揉み消す。すぐ後ではあいかわらず暖房装置がシュウシュウという音をたてているが、その音がこの室内を覆い包む唯一の音であった。

私は前日この信州にやって来たのだった。列車からプラットフォーム・フォームに降り立った時、もはや初春だといつてよい時節なのにまだ粉雪が舞っているのに気づいて、私はびっくりした。そして駅を出て、ほとんど溶けかかっているもののいまなお根雪が残っている光景が眼前に拡がっているのを見た時、私は二度目の驚愕を強いられたのであった。東京を出る時私はもはや雪のない信州を想像していたのであり、また夜更けに列車が山間を走っている時にも、

しかし私はテーブルのグラスに手を延ばし、その水をがぶ飲みする。すると非常に冷たさが咽喉と食道を順次通過するのを感じ、弛緩した躰をひき締めることができた。味などは認めることができなかった。やがて私は自分だけの黙想へと入ってゆく。△私は妻から逃れてきた△と落ちつきを取り戻した私は自分の現実世界における立場を規定すべく、動きにはならぬ言葉の唇の上に乗せていた。△そしてこういう信州などという処へ来てしまった。あの女との想い出が何年も私を捉えつづけたこの信州へ。私はもはや若いとはいえない年齢に達している。感傷的になることもないだろうと思っていた。その私が家庭からの逃避地として選んだのはここ信州だ。どういうわけだ？ あの女に未練でもあるのか？ いや、いや、そんなことはあるまい。確かに二十歳の頃自分が生きながらえたのはあの女のおかげであり、その意味で彼女の存在が私の人生の最深处に位置しているといえるにしても、あの女と別れる時には私はすでにどうにか一人で生きてゆける男となっていた。それなのに私が今なおあの女に執着するはずがない。しかし△私は傍の赤く燃えている暖炉の中を覗きこみ、その落ちついた、包容的な炎に全身的な安堵感をかんじた。△しかし、都会からの逃避場所として、最も安楽な土地として、ほとんど無意識的に選んだのがここ信州であるという事実には

私は窓の外にまだ雪が消え残っているなどとはつゆ思いつたならなかったのである。

私は泥濘る道に足を踏みいれ、駅の正面の中央通りからは左側に外れた裏通りに入っていた。すぐ右手に山小屋風の構えをした喫茶店が眼に入ったので、何の躊躇いもなくその店に入った。ガラス・ドアを押し開けた時、中から熱風に近い空気が私の両頬を襲撃したので、私は狼狽えた。しかしそれは熱さではなく痛みだった。外気の冷たさに私の顔面の皮膚の感覚は麻痺し、店内からの暖房された空気を痛みとともにしか感じることができなくなっていたのである。

私は奥まった、実際に薪が燃えている煉瓦造りの暖炉の近くの席に腰をおろした。顔面の感覚麻痺がそれほどもなくなり、室内の空気を痛いとも感じなくなった時、ウェイトレスが水を持ってきて「これはミネラル・ウォーターです」と言い、「ご注文は？」と訊いたので、私はこれも十年來固執しているストレート・コーヒーの名を言った。

おそろしく踵の高いヒールのせいでぎこちない歩き方をするその店員の背を見おろしたあと、私はゆったりとした黒皮の椅子の中で顔を両手で覆った。列車旅の苦痛からの解放感と、両頬に感じた極寒から逃れられたという安堵感。それらを同時に感じて、私は全身の力が抜けるのを意識した。旅の疲労から睡魔に襲われたようでもあった。

やはり深い意味があるだろう。私は本当は今の生活に甘んじたいとは思っていないのかもしれない。私はもしかして心の隅であの女だけを愛しつづけているのかもしれない△そのように考え、私ははじめてトレンチ・コートを手を脱いだ。躰が暖まってきたからだ。コートから腕を抜く時、ぎこちない動作だったので、ポケットから煙草が一本赤い絨緞の上に落ちてしまった。背を屈めてそれを拾い、灰皿の中にある店の名前の入ったマッチを擦った。眼をあげると、使われてはいない、黒っぽいカヴァーの掛かった大きな冷房装置が私に見えた。

僕たちは寒さに震えていた。外は土砂降りの雨で、僕たちは一本の傘でその中を歩いて来、おかげで躰じゅうが濡れているというのに、僕の真後では冷房装置がウンウン唸り声をたてて冷たい風を吹きつけていたからだ。「すごく寒いね」と僕は言った。「どうして梅雨時に冷房しなければならぬのだろうね」

麻耶は項突き、「そうね」と言った。「とても寒いわ」カフェ・オ・レを飲もうとする彼女の黒髪の左半分はまだぐっしょり濡れており、そのうちの一筋の髪の毛が頬を伝って彼女の唇の端にへばりついている。麻耶はその髪の毛

を指先で払い、その動作を凝視していた僕に微笑みかけた。「服も濡れちゃって、とても寒いわ」と呟いた。

僕は皮靴から紺色のアノラックを取り出し、彼女に渡した。彼女は裏返しに小さく折りたたんでいたその防寒具を元に広げ、頭から無器用に被った。しばらくして麻耶は「ああ、これならいいわ」と云った。

早朝だった。やがて店内に人が込みはじめようとする時刻だった。すでに会社員らしい男が二、三人腰かけており、薄暗い奥の席では高校生にみえる数人の男女が何やら狼狽なことを言っている声を潜めて笑いあっていた。店のウィンドーを通して、外の雨の中を傘をさして駅に急ぐ人々の数が次第に増えてくるのが判った。僕は店のマガジン・ラックに立ててある新聞を取りに行き、一部だけ残っていた日刊紙と、麻耶のためにはスポーツ紙を一部もって来た。彼女にスポーツ紙を渡すと彼女はいらないと云った。「眼が疲れているのよ」

僕はテーブルの上に日刊紙の社会面を広げ、新聞紙の下になったコーヒー・カップと皿をその上に置きなおした。印刷されたばかりの文字は皿の下についたコーヒーの汁がつくる染みに浸って読みづらくなっただろう。僕はゆっくりとブラジル・コーヒーを啜る。「おい、この記事は昨日の東京の夕刊に出ていたね」と僕は麻耶に向かって云った。

この土地には夕刊紙がないのだろう。彼女は俯むいていた顔を挙げ、その眠たそうな充血した眼を瞬たかせてやっと興味を示したような顔つきになった。彼女は新聞紙を覗きこみ「ほんとね」と云った。

僕は躰を乗りだしてきた麻耶のためにその日刊紙を放棄し、かわりにスポーツ紙を読みはじめた。ばかりでかい見出しの割にはあまりおもしろくはない。すぐにページをめくって、興味本位な記事が書かれている個所を読みはじめた。性器が勃起してくるのを意識した。なおも熱心に読んでいると麻耶の視線を感じたので、僕は顔を挙げた。彼女はキョトンとした表情をしていて「なにがそんなにおもしろいの？」と訊いた。僕は無意識にニヤニヤしていたらしい。僕は自分が赤面するのを感じ、周章で新聞をまるめた。

気がつく店内は満員と云ってよいほど込んでいた。ウィンドレスがさながら跳びはねる野兎といった感じで店じゅうを駆けめぐっていた。僕はまだ寒さを感じていた。コーヒーを飲み干すと、僕は躰をひと震いさせ、麻耶に向かって煙草を出すように云った。彼女はショルダー・バッグを開け、中からベンソン・アンド・ヘッジとライターを出した。彼女は一度煙草をくわえ、それに火をつけてから僕に渡してくれた。フィルターに口紅がついている。麻耶は僕に向かって「雨がやむといいのね。雨のお城もいいと

は思うけど」と云った。

「ああ、もう少ししたらもう一度行ってみよう。まだ早すぎるよ」

僕はあまりの寒さに、店員に冷房装置をとめるように云ってやるうかと考えはじめた。カウンターでマスターらしき男と話をしていたウィンドレスがこっちへやって来るのが見えたので、僕は声を掛けようとする。

さきほどのウィンドレスが私に近づいてき、私の顔をすぐ脇で「おまちどうさまでした」と云い、コーヒーを置いて行った。私は指の間にはさんでいた煙草を大理石造りのように見える四角形の灰皿に置き、そのストレート・コーヒーの匂いを嗅いでみた。やはり外での冷気が原因してかほとんど匂いが判らなかった。嗅覚の麻痺が依然回復してないのだろうか。匂いを嗅ぐことをあきらめた私はまず一口ブラックで飲んでみる。苦い味が私の口腔に広がった。それからまだ悴んでいる手をのぼして砂糖を入れ、もう一度一口飲んでみる。最後にミルク・ポットからミルクをたっぷり入れてもう一種類目の味をあげよう。いつかもの本でそのような、コーヒーの三種類の味の方を読んだことがあったのだった。

この喫茶店はたしかあの時あの人と入った店だと思ふ。

まちがいないだろう。駅前の裏通りに来た時、たしかあの時見た外観を残していたので躊躇わずに入ったのだが、やはり店の内部は半分改装しているようだ。無理もないことだ、と私は考える。なにしろ十年も経っているのだから。

その十年とはいったい何だったのだろう、と私は思う。私の傍の暖炉の暖かさは私自身を覆い包み、私はもはや額に汗を流かべるほどになっていた。私は水をひとくち口に含み、思考を続けようとした。△私はあの人と別れたあと自分なりに生きるすべを発見してきたように思う。あの人と別れる直接の原因となった男が（彼はその時、今の私とほとんど同じ年齢だった）偶然彼女の部屋で会った日、私はアンファンテリスム（幼児志向）と形容したが、たしかに彼女と別れるまでは私は幼児志向に毒されていた。私の十代後半から二十歳くらいまでのノートを見て、いたるところに「純粹さあるいは純朴さ」「一本気」「非妥協性」などという言葉が散見される。しかし私は彼女と別れることによってすぐさまそのアンファンテリスムから脱却できたのではなかった。あの人と別れることによって私はじめて、誰しも一度は経験する絶望、「なぜ生きるか」が皆目判らなくなっ行って行き場を失なったすえに感じる絶望、

を真に味わったように思う。私はあの女を得る時にも自殺しようとする己れを救ったわけだが、それはあくまでもなくしくずし的にであったのだ。だから別れたあとと真に絶望した私はその頃、酒を飲むことで気を紛らすことを覚え、手あたり次第に女と寝る享楽趣味に陥った。そしてそのような生活を送ることによって私は徐々にアンファンテリスムから脱け出していったのだ。▼

僕は今高円寺のジャズ喫茶にいる。テーブルの上には翻訳のための原書本、辞書、それに小さな字がぎっしり詰ったノートがある。今訳しているのはフランスのヌーヴォー・ロマンの作家の一人で、明日までにこの下書きノートを例の翻訳家のところにもってゆかねばならないのだ。

店内は薄ぐらくて（それぞれのテーブルの上だけは前衛美術を模したような長い筒状のライト群に照らされて、結構明るかった）、客の姿はほとんど黒のシルエットと化していた。

僕はビールを飲みながらあと数ページを残したこのポケット版に悪戦苦闘していたのだが、特に今訳している箇所は、この流派に特徴的な、話が急に過去へ戻ったり未来へとんだりする個所なので、ほとんど訳がすすまない状態だ

った。僕の耳許ではマイルス・デイビスの例の金属的なトランペットの音がかなり立てており、僕の心理的なフラストレーションをますます刺戟するのだった。夏期休暇に入っている予備校からの収入が皆無であるという不安から（もちろん翻訳の下請けのアルバイトのおかげで生活費が底を竭く、というわけではなかったが）、僕のこのフラストレーションは限界点に達していた。僕は顔を挙げ、すると正面のライトの光の中にその顔を、せせら笑いをつくりながら浮かびあがらせている女子学生が見えたので、反射的に「なんだこの野郎！ 笑いなんか浮かべやがって」と叫んでいた。その声は店じゅうに響き渡るほど大きくはなかったが、しかしその女子学生は途端に顔を硬直させ唇をひき締めたかと思うと、矢庭に立ちあがって金をテーブルに置き、僕に「なによ、インテリやぐざ！」と叫んでから、ハンド・バッグを乱暴に振りまわしながら店を出ていった。僕はその時、女の態度に無性に腹が立ったが、よく考えてみると思いの自分の方だったので、どうにかしなければ、と思ひ、すぐさまテーブルの上を片づけると代金を置き、いつでも顔をにこにこさせている愛想のよいマスターが「どうしたのですか？」と訊くのにも構わず、店を飛びだして女のとを追ったのだ。

僕は駅の方に駆け走っている時、ふと僕がこのようにす

ぐさま店を飛び出した真の理由はあの女子学生がなんとなく二十歳の頃一緒に暮らしていたあの女に似ていたからではないか、と思ひはじめていた。それはほんの一瞬の印象であったが、しかし一刹那の印象であったがゆえに、かえってそれだけ強く僕の心に焼きついたのかもしれない。

僕は少し前をあいかわらず手荒にハンド・バッグをあつかいながら歩いてゆく女子学生を見つけた時、駆け寄って彼女の右腕を掴んだ。女は振り返り、僕を認めると「なにをするのよう」と云った。

「ああ、さきほどはすみませんでした。何分酔っていたもので」と僕は云った。

「酔っているという理由で他人への罵倒がすっかり許されるとでもいうの？」と女子学生は顔面の険しい表情を消さずに云う。「大体、のこのこと私のあとを追ってくること自体おかしいわよ。あなたにそんな権利はないわ」

僕と女子学生のそうしたやりとりを怪訝そうに見やりながら通行人が通りすぎてゆく。僕は居心地が悪かった。僕は冷静になろうと努めた。「いや、本当に悪かったと思っているんだ。全く僕は最悪の気分の中にいた。どうしようもないフラストレーションの中でああいうことを云ってしまったのだ。関係のない女の人を怒らせて、そのまま放っておくことなどできないからね」

女はほんの少しばかり、だがそれとはっきり知覚できる程度にその表情を柔げた。なおも僕は続ける。「たしかにあなたに云われたように僕はインテリやぐざなのかもしれない。知識人ぶって、見も知らぬ女性を罵れることがでさるのだから。しかしね、実をいうと、明日が締切りの翻訳が全然捗らなかつたから焦っていて、だからほとんど無意識的にあんなことを叫んでいたのだ」

「判ったわ。私もあなたを罵倒したことだし。同罪ね。あなたを許すわ」と彼女はすなおに云い、「それじゃあ」と云って僕から離れようとした。

僕はその女子学生の右腕をもう一度掴んだ。

「いや、僕はあなたと話がしたくなかった。どうかかな？」

女は一瞬躊躇い、口籠ったあと「ああ、いいわ」と云った。「私、実はインテリやぐざに興味があるのよ」

僕と女子学生は国電の高架線のすぐ下にある喫茶店に入

った。僕はその喫茶店で、彼女は実は女子学生ではなく小学校の教師をしていること、卒業したのは僕と同じ大学の教育学部であること、を知ったのだ。僕のこの間違いに對して「うん、当然ね、それは。私はこれまで学校の教師に見られたことがないもの。これでも二十三なのよ」と云った。「名前はね、多恵子というの。恵みが多い子供よ」

僕はこの時、彼女、多恵子に対してさきほど感じた、あの女に似ているという印象を完全に打ち消していた。多恵子は小柄な女で、僕と彼女が坐っているカウンターの斜め上から照っている照明の陰翳のせいで顔はどす黒くなっていた。しかしよく見ると目鼻立ちを整っていて、一種独特な小悪魔的魅力を具えた女だった。

僕が、さっきあなたが薄笑いを浮かべていたからこそ僕は思わず腹を立てたのだ、と云うと、多恵子は「あら、そんなことはないわよ。私は笑ってなどいなかったわ、あなたの見間違ひよ」と答えた。

「そうかな。あんな暗い処で見たので笑っているように見えたのかもしれないな」

すると彼女はテーブルに身を乗りださせ、口を窄めるようにして「そうよ。あんな薄ぐらい不健康な場所もないわよ。あんな処で、よりによって翻訳の仕事をするなんてあなたはやっぼどの莫迦よ」と云った。

僕は苦笑いを浮かべ、多恵子に、じゃあなぜあなたはそんな不健康な場所に行ったのか、と訊こうとしたがやめた。また噛みつかれそうに思ったからだ。

僕はその場で彼女の住所と電話番号を訊き、もう遅いので帰らしてもらいわ、と云う多恵子と一緒に店を出た。高円寺の駅から中央線で都心に向かう彼女と共に電車に乗り、

僕は次の中野で電車を降りたが、その時車輪のドア・ガラスからまさしく健康的に微笑みかける多恵子の顔を見て、僕は一瞬、この女とならうまくゆくかもしれない、と思ったようだった。

そうなのだ、あのジャズ喫茶で私は妻と出会ったのだ。私はあの時、その前年の四月から勤めだした予備校の二度目の夏期休暇を経験していたのだ。私は前年の秋に大学院をやめていた。専攻はフランス文学で、ブルーストを研究していたのだが、己れがアカデミアンには向いていないと感じはじめたからだ。大学院をやめた翌年の春、その場しのぎのアルバイトばかりして生活費を稼いでいた私は、以前通った予備校の知り合いの教師に無理を承知で頼みこみ、その予備校の講師の席を得ることに成功した。

教科は現代国語で、仏文の私には畑違いであったが、そのような無理が通ったのも例の教師の予備校における発言が絶大だったからである。こうして私は大学を卒業したばかりの青臭い面をさげて（事実私は二十四歳だった）、名譽教授然とした年寄りの教師たちに立ち交わって、膨大な数の予備校生が待っている大教室に小まめに出た。アカデミズムを拒否したはずの私ではあったが、しかし個人的には私は

予備校が好きであった。不真面目にしか教室に出ない予備校生は確実に入学試験に失敗し、真面目に出席する者は確実に合格する（もちろん例外が皆無というわけではないが）、これほど歴然とした世界はほかに考えられなかった。入学試験直前になると出席する予備校生は目に見えて少なくなり、そのうちに十人足らずになってしまったので、私はほとんど個人教授をする具合に一人一人の予備校生に話しかけ、時には教科書を離れて中原中也と長谷川泰子と小林秀雄の三角関係の話などをする。すると淫靡な笑いが拡がり、そのうちの一人が「では先生はどうして泰子が中也の時も小林の時も妊娠しなかったとお思いですか？」と訊いたので、私は「さあ、難問だね。それがこの関係のハイライトだが、永遠に解けぬ謎ではないかな」などと答えておいた。

もちろん正規の教師ではなく臨時の講師という待遇だったので、予備校の収入だけではぎりぎりの生活しか送れなかった。そこで私は、同じく例の予備校教師に名の知れたフランス文学翻訳者を紹介してもらい、その翻訳者の翻訳の下請けをすることで臨時の収入を得ていたのだ。たしかに、私が苦心惨憺して仕上げた原稿（あるいは下書きノート）を持ってゆくと、その翻訳者はただ「ご苦労さん」と云い、数週間経つと私の文章が適当に直された翻訳本がその翻訳者の名前で店頭にあらわれるのだが、その度に私

はいいしれぬ屈辱感を味わった。しかしなによりも、この翻訳の収入の方が予備校の収入を上まわることがあるのが私にとって魅力的だった。それに私は、この高名な文学者が飽きもせず次々と私にその翻訳の下請けを依頼すること自体、私の才能を買ってしてくれるからだ、と適当に解釈して悦に入っていた。いつか一人立ちしてやる、と自らに思いこむことで私はその屈辱に耐えていたのだ。

しかし三十になった現在でも翻訳者として自立してないところを見ると、私はあのようなアカデミックな表世界、文学者としての自分の名前が刻印される学問の世界、にはどうしても虫が好かないのだろう。今はもはや一介の予備校教師になりきっていて（たしかに予備校もアカデミズムの一環にはちがいない。しかしこの場所には決して陽の当たらぬ裏通りの世界であるだけに、私にとって是非常に住み心地のいい処なのだ）、フランス小説の原書を見開く習慣ももはや失なってしまっている。そうしたフランス文学を完全に諦めた直接の原因は、私の妻、多恵子と結婚したことだったと云える。

初めて多恵子に会って四、五日してから、僕は彼女のアパートに電話して多恵子を呼びだした。

僕と多恵子は新宿で落ち合い、花園神社の近くのこじんまりとしたスナックにはいった。多恵子は、その店では友達が無効している云々のだが、僕たちが入っていった時はその友達はいなかった。多恵子がマスターに声をかけると、マスターは「彼女、今日は休みですよ」と云った。

小さな店なのに、僕と多恵子の座り場所のないうらみ込んでいた。僕たちは奥の方へ進み、少しばかりの空間を見つけたので、マスターの用意してくれた二つの木製丸椅子に腰をかけた。「この店へはよく来るの？」と僕は、今日いったボトルからの水割りを口に含みながら云った。

「ああ、よく来るわよ。でも男の人と来るのは、考えてみると初めてだわ」

僕と多恵子はこの店でそのように話しはじめたのだった。この店で、僕は自分の故郷のことを語り（「あの市は海岸線に位置するけれども、これといった特徴的な産業をもっていない小さな市なんだ」「そういえば、あの市は武蔵坊弁慶の生誕の地と云われていてね、駅前広場には、二メートルほどの、薙刀を中空に構えた弁慶像が立っているよ」）、また僕が高校時代に耽読した作家で、現代日本文学の第一人者と云われている小説家のことを語り合っていた（「あの作家はサルトルに絶大な影響を受けたとばかり思っていたけれど、ある評論にね、『本来、サルトルよりもカミュー

を愛した詩的感性にめぐまれたこの作家が」という個所があって、ひどく意外な気がしたことがある」）。

多恵子は初めのうち、どこかしらぎこちなさそうでも、僕の話す言葉にもただ項突くだけで、さながら乙女の恥じらい、といった様子を見せていた。ところがウィスキーの酔いがまわりはじめ、眼が充血してまるで白兎のようなところんとした視線を僕に投げかけはじめると、彼女は俄然饒舌になった。その変貌にはただ驚くばかりであったが、同時に多恵子の充血した眼は僕の性的な欲望を擲るのだった。そこで僕が多恵子に卑猥な冗談を云うと、彼女は丸椅子の上で身をのけ反らせ、小鼻をひくひくと蠢めかして笑った。僕と多恵子はこの店で終電過ぎまで飲んだ。多恵子は酒にはあまり強くないのか、ぐでんぐでんに酔っていたので、僕がその身を支えながら店を出なければならなかった。僕たちは靖国通りでタクシーを拾った。

多恵子のアパートの前まで来た時、彼女は「ここまでいいわ」と云った。僕は意外な気がし、黙ったままでいた。多恵子の歩きぶりはまだふらついていて危なっかしかった。僕はまだ多恵子の身を離さずにいたが、すると多恵子は小さく「そうね。ここで帰れ、というのでも残酷だわね。いいわ、私もすごく酔っていることだから、部屋まで送ってく

ださる？」と云った。

この時僕は多恵子と今日関係を結ぶ気でいた。僕は、多恵子がすでに処女ではないことを確信していたし、彼女のあの煽的な仕種を見るだけで僕を求めていることは明らかだったからだ。

僕と多恵子はアパートの二階の一室にのぼりこみ、僕は畳の上におっ倒れた多恵子を、「やめて、やめて」という彼女の口をおさえながら、犯したのだった。彼女は、意外にも、処女だった。

多恵子は僕の敷いた蒲団に横になった時も、しくしく泣いていたが、僕がその蒲団の中で彼女の身を擁護してやると、多恵子はまるで小猫のように柔順に寝入ってしまった。

次の朝僕が目覚めると、多恵子は台所で僕に背を向けて立ち働いていた。僕が「ああ、何をしているんだ？」と訊くと、彼女は「朝食をつくっているよ」と答えた。多恵子は僕の方へふり向いたが、その顔つきは朗らかさに満ちていた。今にもハミングをしはじめそうだった。

多恵子のつくってくれたベーコン・エッグを食べている時、ふと僕は「ここで暮らしてもいいかな？」と訊いてみた。

すると多恵子は一瞬驚いたようだったが、しかし僕の眼

を熟と凝視めながら「うん、いいわよ」と答えたので、僕はそれなら一緒に暮らしてみようか、と思ったのだった。

そのようにして私と多恵子の同棲生活がはじまったのだ。やがて夏期休暇も終り、多恵子は小学校に、私は予備校に勤めだしたが、なにかしら怠惰な日々が続く、私はとうとう例のヌーヴォー・ロマンの翻訳を終えて以来、翻訳の仕事をいっさい放棄してしまった。その一番大きな理由は、やはり多恵子の給与がそのまま私たちの生活費に入るという生計上のものだったかもしれない。ともかく私は自分が完全に満たされているような気がして、必要以上のことをする意志を失なっていたのだ。私はそれより数年前の、あの女との同じく満たされた生活を思いだしていたが、しかし、その間に幼児志向からの脱却の期間があっただけ私はより凶太くなっていた。

その秋に多恵子は妊娠し、私たちは正式に結婚したのだ。それ以来平穏な日々が続いたといえる。私は妻との結婚当時のことを思いだすことに疲れ、ふっと意識をこの喫茶店の内部に戻し、一度溜息をついてからテーブルのコーヒを飲み干した。八男の子供も産まれ、普通なら家庭を守りとおしてもよいのかもしれない。もう三十なのだから。

しかし満たされた生活といっても、何かが足りないのだ。私は、そのもの足りない何かをあの女が、いやあの女だけが持っていたような気がする。なぜ今ごろになって十年も前の女のことを思い出し、あげくの果てに家庭を飛び出したりしたのだろうか？

私は地下鉄のエスカレーターを登っていた。何度も何度も登ったエスカレーターで、しかしもしかしたら今日がこのエスカレーターを登る最後の日になるかもしれない。僕と麻耶は去年の秋に別れたのだった。ある日僕が麻耶のアパートに行くと、突然彼女は「もうあなたとは会いたくないわ」と云いだした。麻耶は一週間あまりある出版社でアルバイトをしていたのだが、その編集者が好きになっただと云うのである。「あの人は素敵な人だわ」

僕は麻耶を何度も殴ったが、麻耶は泣きながら「もうあなたとは別れる」と云い張る。僕は麻耶を、麻耶だけを愛していたが、いかに彼女が僕に対して耐え忍んでいたかを思い知らされたのだった。僕は、彼女と初めて関係を結んだ時のように、麻耶を力尽くで犯してもよかったのだが、そしてそのことによって麻耶の新たな幻想を打ち砕いてもよかったのだが、しかし犯すことによってさらなる袋小路

に陥るような気がして躊躇われたのであった。

陽が落ちて外が薄暗くなったころ、僕は僕と麻耶との言葉の堂々めぐりに疲れ果てて、「じゃあ、今日は帰るよ」と云って麻耶のアパートを出たのだった。

その後も僕は、例の「一本気」「非妥協性」といった論理に凭りかかりながら、幾度も麻耶を翻意させようとしたが、麻耶は聴かなかった。あるいは、理性に訴えず、もつと獸的な次元で係わって麻耶に有無を云わせなくする、という方法もあったのかもしれないが、とにかく僕はそういう方法をとれずにいたのだ。

またもやお互いの言葉の堂々めぐりが続いた揚句、僕が麻耶と最後に会ってはや三カ月ばかり過ぎ去ってしまった。今日、このように麻耶の住んでいた街へやって来たのも、やはり僕は麻耶が好きだからなのだ。だが、もう麻耶はあのアパートに住んでいないかもしれない、という思いが通り過ぎる。

エスカレーターを降り、踊り場で方向転換して今度は階段を登りはじめると、急に冷たい風が僕の頬を打った。顔を挙げる。雪だった。階段のために視界の上半分しか見えぬ、その改札口の外の道路に雪が降りはじめていた。

僕は改札を出、トレンチ・コートと襟を立てて、麻耶のアパートの方角に向かう。

信号のある四つ角まで来ると僕は鉄筋の三階立てのアパートを見あげた。やはりカーテンの色が違った。麻耶はすでにあの部屋には住んでいないのだ。この時僕の頭を襲撃った感情が悲哀ではなく、(予想どおりだという)安堵であったことは、いったいどういうわけだったのだろうか。

実は、僕は麻耶と暮らしていたころ、彼女の部屋で、同じような情景の、小説の冒頭部を書いたことがあったのだ。その主人公は地下鉄を出る時、自分は梅雨時にいるのだと夢想しているために、突然の降雪にびっくりするのだが、その男は、同じくこの四つ角に立った時、色の違うカーテンを見て女がもはやいないと知っても、「それでいてもあの女があの部屋にいないければならない、いるはずだ」と考えるのだった。

現実の僕はそういう風には思えなかった。ただ僕は小説の主人公どおりにコートから煙草を取り出して、それに火をつけただけだった。

要するに僕は、麻耶と暮らしていた時でさえ、彼女と別れることを、たとえ小説の中だとしても、予想していたこととなる。そしてたしかに麻耶がもはやいないということを知った時、僕が悲哀を感じなかったにしても、やはり現実麻耶が遠く離れてしまったということを実感すること

は、僕には耐えがたいことだった。僕は立ち竦んだままだった。

しばらくして、ふと通り過ぎる子供連れの主婦や角の酒屋の女主人の怪訝な視線を意識した僕は、麻耶が本当にあの部屋にいないかどうかを確かめることもしないで、踵を返すと、雪の降りつもりつつある道路をひき返したが、その時僕の眼からは涙が流れ落ち、それが僕の顔を打つ雪片の冷たさと混濁りあうのだった。

この喫茶店の暖房のおかげで、私の躰は非常に暖まっております。どうかすると心地よい眠りに誘われそうだった。私はふと腕時計を見たが、すでに列車から降りて大分時間の経っていることを知った。今日この街のホテルに泊るのなら、早いうちに電話しておかねばなるまい。私は立ちあがり、店の入り口の脇にある赤電話まで行き、電話帳でホテルを捜し、その一つ、この街の名をもつホテルのダイヤルを回した。

それがちょうど昨日の夜のことだ。私は昨夜あの城下街の駅の裏手にある大きなホテルに泊まり、次の朝つまり今朝からずっとあの街を歩いてまわり、夕刻になって鉄道で

このホテルのある街にやって来たのである。

私はもう一度窓に向きなおし、カーテンを少しばかり開けてみる。外はすっかり暗くなっている。先程の、こちらを窺っていた人影はもはや見えなくなっている。私は何かしら安堵感を持ち、もはやすっかり暗くなった外の風景に見入りはじめる。窓を開け、あいかわらずの厳寒の中に頭を乗りださせて、再び下の道路を瞰下すと、そのアスファルトに溶け残っている斑雪は街燈のネオンに照って銀色に輝いている。私はそれらを美しいと思わざるをえなかった。私は完璧なものは嫌いなのだ。もう数時間、いやもう数日後には完全に消えてしまいうだろうこれらの斑雪は、しかし確実に、疑いもなく銀色に輝いているのだ。私は思わず放してしまふ。

車の数は夕刻を過ぎたので目に見えて減っており、私はそれらの車体の黒さを嫌悪の念をもって眺めた。どれもこれも皆まっ黒なのだ。私はあらためて感じさせられた外の空気の冷たさに耐えきれず、不意に頭を引っこめ、窓を締めてしまふ。

私は腕時計を見、これからの長い夜をどう過ごそうかと思案する。私は二台のベッドの間に戻り、今日のあわたたしかった一日を思い泛かべ、突然その極度の疲労感に襲われてしまふ。私は窓側の白いベッドの上に身を放りだし、

仰向けになって今感じた精神的な疲労が自分の身体を駆け抜けてしまふのを待つ。眼を閉じる。すると意識の空白が私を襲撃したあと、今日のあの街の情景と十年前の同じ場所をあの女と二人で歩いた情景とが目まぐるしく錯綜して、睡魔に憑りつかれはじめた私が今自分がどこにいるかを認識するのをほとんど困難にする。私は今あの女と二人でこのホテルに泊まっているのだ。私は二十歳だ。私は突如起きあがりながらあの女の名を大きな声で呼ぶ。

一人だった。この部屋にいるのは私一人だ。私は自分が三十であることを確かめる。あの女と別れたことも、自分が今妻から逃避れてきていることも。

私は、部屋の中がまっ暗なので、電気スタンドをつけてからベッドを降り、バス・トイレのドアを開けて中に入る。洋式便所に放尿したあと、風呂に入ろうとしたが、睡いでやめた。鏡の中の、若干暗い裸電球に照らし出された私の陰気な顔を熟くと眺めてから、今度はちゃんと電燈のスイッチを消して外に出た。

私は再びベッドの上に寝ころび、もはや枕許のスタンドの光しかない暗い部屋の中で、いったい自分はどうしようとしているのだろうか、と考え始める。私はこのまますぐに妻と別れようなどとは思っていない。だが妻との四年間あまりの満たされた生活の間ずっとあの女を想いつづ

てきたこともまた確かだ。今あの女はどこにいるのだろうか？ 私と同じ故郷に帰って日常的な結婚生活を送っているのだろうか？ それともまだ東京で生活しているのだろうか？ そうだ、彼女は私とはじめて会った時、「私は書道の個展を開きたいわ、できれば国外、それもヨーロッパ」と云ったのだが、はたして書道家になりえているのだろうか？ √そういう疑問が次々と私の無分別な脳髓の中で起っては流れて、今後何をなすべきかは判断保留のまま、私は曖昧模糊とした眠りの沼の中へと深く沈んでゆく。

△以下続稿▽

ぞか
序哥
VOL.4

〈詩誌〉



月見草 ● 佐藤榮市
東長崎日記 ● なんばみお
投錨 ● 五十嵐 和
虚空 ● 宮島悦雄
特集〈水〉 ●

連絡 〒136江東区大島2の38の15
宮島気付 ☎03(681)6963

編集後記



人がよく死ぬ。自殺者が新聞に載らぬ日はないといってよい。「自殺」は、今年の状況を語る場合の目安になりうると思う。

「死がありふれている」。これは、日頃気づかずにいても、人間の運命における一つの自明の前提である。しかし、ここ最近の、自殺の低年齢化は、その自明の前提さえも自明でないような、あたかも「死」がまた別の次元で語られねばならぬような、思考を要求しているような気がする。

それは、その状況に、どんな未来社会を対置しても、すべて何事か足りず、人間の「無意識」な空間にまで己れの意識を拡散させていくことにも通じる。

思えば、「死」と「無意識」ほど、接近した感情を持つ言葉はないように思う。意識のない瞬間に、人間は「死」を経験しているようには考えられないだろうか。

しかし、問題は、人間の感情さえ機能化し

彼にとって戦争が何であったのか)、あるいは私にとって戦争画が何であったのか(いや私にとって戦争が何であるのか)ということとはひとまず不問にしておく。何々美術家会議というところが、戦争画美術館を造って、「永久貸与」された作品を保存せよ、といっているが、ついでにそれを巡るスキャンダル論争の全ても永久保存すればよからう。それこそ戦争画について誰がどのような論拠を持ったか、時代の明白な資料となるだろう。

(上野公園にて・日高)

目に見える限りではすべてが平穏に流れてゆく日々の中で私たちの心は底のところまで断絶の苦痛に歪んでいる、私はそう感じる。苦痛は私たちが対象化しきれない、従って意志の届かない客観的な世界が強いてくるのだ。私はその苦痛から逃げようとしつづけてきたように思う。幼年期の世界の底なしの透明さへ、あるいは風の匂ひが肉にしみこんでゆくような心からの弛緩の時間へと逃げてゆきたかった。けれど私は自分の苦痛をふりきることではできなかった。それは毒のように心にじんんで私の慰安的な空想にも軋をかけた。私は無知で世界の構造が見えない。ただ自分の

ていくこの世の中で、それに見合うだけの目的が脱落し、まさに手段が目的化して機能化だけしかないことにある。「死」と「無意識」が、無意識に死ぬというように現象的に直結してくるのは当然だ。

人間は、その歴史の進行の中で死者を累積させてきた。その比重は、現在生きている人間よりもはるかに重い。

世も末か。…ともいえず、その重さを生き計らねばならぬ。(新美)

他人の行為をせん索しようとする事は、その作業が表面的な出来事への興味に流れていこうとする度合いの分だけ、スキャンダラスな色合いを帯びてくる。しかもそのような性質の作業は、それに対する批判者の発想のレベルに、そっくり論者の位相を移しかえることが可能なほど紋切型の結末へ近づいてゆくものである。しかし私にとっては、そのような意味での「醜聞」性よりは、程よいのぞき見趣味が感じられる騒動の方が好ましく思われる。「事故のてんまつ」はそれなりにスキャンダラスではあったが、事態が既に個人的な思惑の段階を離れてしまったときには何の面白味も感じられないものになってしまった。

苦痛によってそれを把もうと考えている。私の幼年期の世界感覚へ戻っていくことができないのは、勇気が欠けているからというのではなく、他者が心の中に入ってきたからではないだろうか。もし私が私一人だけを愛していられるのなら、どんな時代にあっても逃げ道は開いているのだと思う。けれども、どんな名目や目に見える形がそれを拒んでも私には心を結びたい人々がいるのだ。私は私の苦痛を憎み、苦痛をもたらずものを憎む。それが私自身であるときは自身を憎む。そしてその感情の力で難しい作業へ向っていきたくて思う。(依田)

ねむると夢を見る。見ない事もあるが、それは覚えていないだけで、実はちゃんと見ているのだと聞いたことがある。私の見る夢はきまってオール・カラーで、これは記憶するかぎり昔から変わらない。小学校の時、たしか一、二年生の頃だったが、ゆうべ見た夢を描きなさい、と言われた。もちろん図画の時間。たまたま「ゆうべ」夢を見なかった私はどうしたものかとウロウロしていたが、クラスメートたちの絵を見てビックリ。なんとモノクロではないか。とにかく仲間はずれにさ

美術界の動向についていえば、もうそれは完全に政治的な手続きを取らねば、他人とその表現については口を出せない、ということになっていくらしい。つまり作家の行為をせん索することにおいてである。今春、国立近代美術館が戦争画の公開を中止したというので随分あちこちから批判の声が上がった。だがそれらのどれを取っても、ついに戦争画、あるいは戦争画家への評価は雲を晴らせる様なものとしてはなかった。理由は声高く批判に加担した者たちが、それぞれの表現的根拠を賭けて、戦争画家の表現の内在性へと付合わなかったからであろう。画家の政治的責任を、そして官営美術館の行政的手続きを批判することは、その批判の根拠が明確だけに、より表現そのものへの批評から外れざるを得ない。数年前の新設都美術館の使用権をめぐる論議の様に、現在は美術家が「徒党」を組まなければ表現が成立しない時代なのである。そんな時代に、表現者に自らと他人の制作内部に徹底的に付合えという方が間違っているのかもしれない。私は勿論かつて戦争画を見た世代ではないし、今回の済崩し公開(某表現による)もいまだに見ていないので誰々の画家が戦争画にとって何であつたのか(いや

れるのが嫌だった私は、見もしないモノクロの夢の絵をデッチあげたようなおぼえがある。実際その時まで普通夢というものはモノクロである、ということを知らなかつたわけだ。

最近数人の友人と夢の話をしたら、ある人は色で、ある人は形で、ある人は言葉で夢を覚えているという話になった。私の場合は色と形。ただし興行きがほとんどない。視力と関係あるのかしら……? それから、ストーリーのある夢、ない夢、何度も見る夢、日常生活を反映している夢、してない夢と、いろいろなタイプがあり、なんとなく見るヒトの個性を暗示しているようで恐いけどおもしろい。あなたはどんな夢を見ますか?(み)

ミオンス 第5号

定価 三五〇円

発行 昭和五十二年十二月二十五日

編集責任 新美康明

山本英夫

依田圭一郎

なんばみお

発行所 ミオンス編集部

板橋区弥生69-1 山本英付

(九七四)四三二九

振替東京八〇八六二